錦織監督 映画の現場から

●○● 41

「渾身」1月5日 山陰上映

百年後も残る作品に

映画「渾身」ポスター

いよいよ映画「渾身（こんしん）」が1月5日に山陰で、12日に全国で封切られることとなった。やっと皆さんに見ていただけると思うと、感慨深い。多くの方々の後押しによって初日を迎えられることに感謝している。全国巡業（キャンペーン）も終盤を迎え、各地で好反響をいただいている。本当にありがたい。

最初は相撲がテーマということで、取っつきにくいとの印象を持ったという声も多いが、見終わった後、その印象は逆転し古典相撲や隠岐のファンになったという声に変わる傾向にある。隠岐に行ってみたいとの声も多いのがうれしい。

私は隠岐の相撲は大変なエンターテインメントだと思っている。知らない人にはそのこと自体は伝わりにくいもの。だから映画にしたいと思った。

しかし、ここ何年かは観客に劇場に来てもらいやすい映画、すなわち小説や漫画などの中で既に何百万部も売れている原作ものなど、いかに知名度のあるものを題材にするか、ということに重きを置いた分かりやすく、宣伝しやすい企画の作品が多い。売りやすさや受け入れられやすさ、分かりやすさが求められることばかりが本当に観客のためといえるのだろうか。

「渾身」はかなりとんがった映画。素晴らしい監督さんはたくさんいらっしゃるが、良い映画を観客に届けたいという思いは誰にも負けていないつもりだ。顔の知られる俳優が主演ということが、多くの観客に見てもらえるきっかけにはなろうが、良い作品であるという証しにはならない。

「渾身」はオーディションで主人公を選んだが、これは近年の日本映画では珍しいこと。伊藤歩さんは既に熱烈なファンも多いが、映画を中心に活躍しているので、テレビを中心とする女優さんと比較すると、玄人受けする、こだわりの女優さんといえる。本物の隠岐を描くのに、売れやすさより、こだわりを優先した。

隠岐の皆さんの多大なご協力への恩返しは、この映画が五十年後も百年後も残ること。今の映画作りが、売りやすい企画になる理由の一つは、全国に広がるシネコンでは少しでも観客の動員に陰りがみえるとすぐに上映が終わってしまうからではないかと思う。公開初日と最初の1週間の数字が、上映を1カ月で終えるか、2カ月に延長するかの指針になるのだ。テレビで見る人気者や何十万部の原作に頼るのも、最初に入っていないと上映が終わってしまうからだろう。

いずれ「渾身」を映画館で見たい！と思っている皆さん、どうかお早めに足を運んでいただきますように。来年は出雲大社の大遷宮の年。時代の転換期に「渾身」が公開されることはこの上ない喜びだ。皆さま良いお年をお迎えください。

（錦織良成・映画監督）

＝第2、4金曜掲載＝